

国語

(古文・漢文を除く)

2019年10月13日実施

100点満点

医療福祉専門学校

緑生館

2020年度

●総合看護学科

●理学療法学科・作業療法学科

推薦2期・一般2期入学試験問題

[注意事項]

- 1 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 この冊子は28ページあります。問題は第1問～第2問まであります。
- 3 ページの脱落や印刷不鮮明な個所を見つけた場合には、すみやかに申し出て下さい。
- 4 解答用紙の受験番号欄等の記入に当たっては、受験票に記入した内容と同一になるように注意して下さい。提出する前にもう一度間違いがないかどうか確認して下さい。
- 5 解答は必ず指定された解答記入欄にはみ出したり、薄かったりしないようにマークして下さい。たとえば、問題の文中または文末等に **35** の表示のある問いに対する解答は、下の(例)のように解答番号 35 の解答記入欄に正確にマークして下さい。
その際、解答用紙を汚したり曲げたりしないようにして下さい。

(例)

解答番号	解 答 記 入 欄				
35	1	2	3	4	5
	☐	☒	☐	☐	☐

(悪い例)

1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	塗り残し
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	はみ出し
1	2	3	4	5	
☐	☐	☒	☐	☐	消し残し

- 6 解答用紙は鉛筆でマークした部分を機械で直接読み取りますから、[注意事項] を正しく守って下さい。とくに、訂正する場合には消しゴムでいねいに消し、消しくずはきれいに取り除いて下さい。

受験番号		氏名	

第1問

次の文章を読んで、後の設問（問1～7）に答えなさい。

死者を埋葬する習慣は、遠くネアンデルタール人から始まったといわれている。それは、例えば遺体を洞窟の中に埋め、まわりを花で囲んだり、山羊の角を並べたりといったごく簡単なものであったらしい。しかし、以後約七万年にわたって、人類はさまざまな形で死者を葬送する形式と方法を考案してきた。人間以外の動物には埋葬の習慣を持つものはないとされているので、埋葬や葬送儀礼は人類だけが持つ、もともとも古い文化表象の一つと言つてよい。

では、人はなぜ死者を埋葬し、葬送するのか。また人は、どのように死者を扱い、これと対して来たか。〈葬送〉とは、遺されたものたちが人の〈死〉を確認する一連の手続きであるとすれば、人はどのようにして〈死の時間〉を定めるのだろうか。

〈死〉は個人的な〈生〉の終わりであるだけでなく、人間社会の中で起きる多くの関係性の変容でもあるから、これらの問いは〈死〉を文化的・社会的に再考する重要なテーマとなる。しかし同時にそれは私たち一人一人が〈死〉とどう向き合うか、あるいは向き合わなければならないかという倫理の問題でもある。私たちの時代の〈葬送の倫理〉とは何かを考えてみたい。

現代社会において、〈葬送〉はいつたいたいどのように行なわれ、そこにどんな問題が起こっているのだろうか。私たちは日頃〈ケ〉の世界に慣れ親しんでいるので、〈ハレ〉の儀礼である〈葬送〉の諸形式やその意味について、ふだんあまり気にすることはない。しかし、自分の〈死〉や〈生の終わり方〉を考えたり、身近な人の〈死〉に遭遇したりすると、〈葬送〉の問題はとたんに重い「問い」として現実味を帯びてくる。

例えば、葬儀はどのような形式にするか、またその業者・場所の選定、寺院・弔問客への対応、香典返しなどと言った具体的な問題はもちろんのこと、葬礼の経費を誰がどう負担するかは、どの家庭にとってもなかなか大きな問題である。葬礼に関わる経費の高さは、欧米先進国に比べ、日本は約十倍近いという統計もある。そして葬礼の後の墓地確保や、折に触れて行なう年忌のこと。数えあげればきりが無いが、《死》のもつ社会性のために、これらのことは自分の信条や意志だけで勝手に決められない場合も多い。《死》を悼む純粋な心情が世間体（俗習）や経済条件に拘束されてしまうやりきれなさを、多くの人が感じているのではないだろうか。

一方、実際にとり行なわれる葬礼はどうかと言えば、私の知る限り、おおむねパターン化した演出・プログラムによって進められるものが多いように思う。見送る側に見れば、慣れない葬礼を手際よくこなしてくれる専門業者のおかげで、急な出来事もつつがなく行なわれるという安堵感があるかもしれないが、一方で、かけがえのない人を失った遺族や参列した人々の心情が、定められた儀礼によって一律に処理されてしまうような、ある空虚さ、形式的な印象をぬぐい得ない。葬送儀礼に創意工夫が足りないなどと不謹慎なことを言うつもりはないが、私たちの《死》に対する視線が、何かひどく単一で、貧しいものになってしまったのではないかという感じを強く持つ。

葬礼が極度に産業化されてしまったこととその形骸化（形式化）とは、言うまでもなく表裏一体の関係にあり、それは近代に特有な現象なのである。現代は、《死》すら経済原理によって管理されてしまっている時代なのだ。私たちは、すでにずいぶん前から《死》に対する深い想念を自由に表現する手段を見失っている。また、それと同時に、社会的儀式としての《葬礼》は、いまやすでに《目に見える形》で私たち個人個人を差異化し、社会の階層システムとすべての人間の序列化を保証する行事になっていることを、私たちは銘記しておかなければならない。

いま、私たちにとっての《新しい葬送の倫理》とは何か再考するにあたって、多くの葬送儀礼の中から、古代儀礼の詳細を伝える一例として、中国古代の葬送儀礼を選んで紹介し、その内容と意味について考えてみたい。

中国古代の葬送儀礼については『儀礼』『礼記』その他の古い文献（主として儒家文献）に詳述されており、『葬送』が極めて重要な儀礼として考えられていたことが分かる。『儀礼』諸篇に残された記録によれば、『土』と呼ばれる階級の葬送儀礼の大枠はほぼ以下のようであった。

儀式は、まず、ある人の病気が重篤になった時の所作から始まり（室内の清掃、衣装替えと祈り）、その人の死が確認された直後の〈復礼〉（屋根に上って死者の魂を呼び戻す）、そのあとの〈小斂〉（二日目に屍を堂に移して衣装を替える）〈大斂〉（三日目に屍を棺に移す）、〈殯礼〉（屍を棺の中に納め、殯宮に置く）と続き、やがて埋葬の日を占い、良い日を選んで、〈葬礼〉を行ない（祖廟に報告したあと墓に葬る）、最後に〈虞礼〉を行なって（死者の精を殯宮に迎えこれを鎮める）、一連の〈葬送の儀〉は終了する。そして、この間に、儀式を行なう儀場や参加する人の儀場での位置、各儀節のこまかな順序や動作、主人（喪主）と外部者・君主（賓客）との挨拶や贈答品、神霊への度重なる供具や共食の方法などが、びっしり書き込まれている。

また、『儀礼』その他の記録によれば、〈葬礼〉（埋葬）のあと、葬送する人の身分や死者との間柄によつて期間の異なる服喪礼が行なわれ、最長三年におよぶ謹慎の生活が続いた（三年の喪）ことが伝えられている。一般にはそれも含めて葬送儀礼とされるから、死者は何十日、何か月、何年もかけて、ゆつくり手厚く葬送されたのである。

ところで、上記の葬送儀礼をよく読むと、この中には「死」をめぐる古代的心性や宗教的感情を色濃く残す儀節がいくつも含まれていることが分かる。例えば、死のあとの〈復礼〉（魂呼び）は、「誰々よ、この世に戻つて来てください」と言つて死者の復活を天に向かつて叫ぶ儀礼であるが、それは死者から離脱した魂がもう一度もとの身体に〈復〉つてくるよう呼びかけるためのものであった。また〈殯礼〉は、死者を最終的に埋葬する前に、仮に棺に納めて別れをすませ、しばらく殯宮に置いて生者近くに休ませておくために行なわれるものである。古い注によれば、それは死者がすぐに葬られ、この世から遠ざかつてゆくのを嫌う生者の心情に基づくものとされている。

神霊に対する供具の多さも、単に富を誇示するためではなく、〈死〉に対する畏敬の念の表現と見なければならぬ。（ハレ）の世界では、神聖な出来事に対する一種の心情表現として、ときに度を越えた〈物の蕩尽〉が行なわれることがある。さらに、〈虞

礼」の際に、戻ってきた死者の霊が憑りついた尸かたしろと喪主とで行なう共食は、祖霊となる者と生者との神秘的交感のさまをよく伝えている。はるか遠い時代から人々が感じ取っていた、死者に対する哀悼の念の痛切さ、異界へ行ってしまった者との再会・交感を願う心の強さが、これらの儀節を生み出したのであろう。

また、整然と定められたいくつもの服喪規定は、ほかの記事と同じく必ずしも歴史的事実とは言えないが、服喪礼そのものは、もともと死者が悪霊として生者に害をなすのを畏れ、その鎮魂しんこんのために行なわれたと考えられている。

そして、服喪礼を含めると葬送儀礼の始まりから終わりまでの期間は『儀礼』ではきわめて長いものになるが、例えば、一度死者を埋葬したあと、長い時間を経て白骨化した死体をふたたび埋葬するいわゆる〈第二次葬〉を行なう習俗は、世界各地で見られるものであり、〈死の時間〉は、普通私たちが考えているよりもはるかに長いのである。生物学的な〈死〉の判定をめぐって、いま、さまざまな議論が起こっているが、〈死〉を瞬間的な出来事とは捉えず、ある時間をかけて生者に認定されるプロセスと考えるのは、親しい人を失った人間の心情としてごく自然なことなのである。

一方で、『儀礼』に見える葬送儀礼の記述は、その大半が、儀場における人々の位置や儀式を行う順序・順番、また喪主と賓客とのやりとりや供具についての具体的規定などに費やされている点も、注意しておかなければならない。それは、これらの儀礼が、定められた〈礼〉秩序に則って行なわれることによつて、参加者（生者）の社会における諸階層秩序の維持と安定を保証する〈システム〉として機能していたことを表している。中国古代の知識人にとって、葬送儀礼は、死者を送ることよりも、生者の社会における自己確認を優先課題とする〈場〉として捉えられていたのである。

放置しておけば限りなく混乱してゆく戦国時代の新しい社会の中で、〈礼〉の規定がいかに必要であるかを最も精緻せいしにまた執拗しつぎやうに説いたのは荀子（紀元前三世紀）であった。『儀礼』という文献が整理され、儒家学派に伝えられた時期は、おそらく『荀子』書が知識人に好んで読まれた時期と前後するのではないだろうか。

だが、私たちはここで、つとに春秋時代の孔子が次のような指摘をしていることを思い出しておきたい。孔子は言っている。

礼は、過度に華やかであるよりも、むしろ質素な方がよい。葬送の礼にあたつては、軽くなごやかであるよりも、むしろ激しい悼みの情がなければならない。

と（『論語』八佾篇^{はついつ}）。（礼）が次第に形式化しつつ、ますます豪華さを競うようになっていた当時の文化状況を憂えた孔子は、葬送儀礼においても、死者への想いが忘れ去られ、生者の社会秩序を確認するだけの（場）になっている現状に、人間精神の退落を見たのではないか。共同体は、それを支える強い（精神）（倫理が成り立つ前提となる心情）のつながりがなければ蘇生できない。この想いこそ、旧秩序崩壊期に生きた賢者・孔子の出発点であった。

（葬送）をなぜ行なうかではなく、葬送儀礼に必要なものは何かを、孔子の言葉は的確に語っている。（激しい悼みの情）を（儀礼）（形式）の中に取り戻すこと。それは、死者と生者との関係性の消滅を通じ、生者自身も（一度死ぬ）ことを意味している。（激しい悼みの情）とは、何よりもおのれの心身が傷ついていることの表現である。（葬送）において、私たちは他者とともに、みずからの（死）もまた見送らなければならないのだ。現存する『儀礼』の一見味気ない儀式や規定の背後にも、この（葬送の精神）はかすかにその名残をとどめていたかもしれない。

日本の古語である「はふむる」（葬）は「はふる」（放・棄）と同根の語であったといわれている。つまり、かつて日本においては（葬る）とは死体を野山に放置し、棄てることであつたのだ。遺棄葬、洞窟葬などの例が多く報告されていることは、そのことを証明している。だが、人工的な手段によつて死体を保存する（葬法）³に比べ、それが野蛮だと一概には言いきれまい。大事なものは、葬送にあたる者がみずからの心を凝視する行為の中にあるからである。

また、漢語の（葬）は、草むらの中に死体が置かれている様子、または草むらの中に死体を隠した様子を表している。やはり、遺棄葬でなければごく簡単な埋葬を指す言葉であつた。だから、啓蒙的なモラリストであつた孟子などは「昔は親が亡くなつても葬送の礼を行わず、皆すぐ道ばたの溝の中に放置した」と言つてその

I

を責めているが（『孟子』滕文公・上篇）、人の（真情）は必ずしも形に表れない場合もあるだろう。

私たちの〈新しい葬送の倫理〉を考える際に、最も大事なことは、形や形式にとらわれている私たち自身の物の見方を反省して
みることではないだろうか。たしかに〈ハレ〉の場面では整った形式が必要とされることは多い。威厳に満ちた〈儀礼〉が、私
たちを〈葬送〉にふさわしい喪の心に誘導する力を持つことは認める。また、立派な葬式を出してもらって故人もさぞかし喜んで
いるだろう、と言いたくなる気持ちも分らないではない。

しかし、繰り返すようだが、〈死〉とはある関係性の消滅であり、そこには、巧みに作られた〈生〉の世界のルールやしきたり
もすべて無用になった相手がいるだけなのだ。かつてあったものが跡形もなく消えてゆくことの不思議を前に、単に形式的である
ことがどれだけ有効であるかは、よく考えてみなければならない。

もちろん〈死〉は、私たちの人生にとって決して敗北でもすべての終わりでもない。しかし、〈生〉の世界での喜怒哀楽に満ち
た生活と他者関係は、〈死〉によって確実に消滅する。そのことを、見送る者がどれだけ自分のこととして捉えられるかが強く問
われるのだ。〈喪失〉こそが人生の最後の到達点であり、〈死〉を見送ることは、その現実に対する覚悟を強固なものにしてゆくた
めの大きな試練なのである。そして、同時に親しい者の〈死〉は、おのずから生者に、死者の〈生〉の引き継ぎを求めるものであ
る。私たちは〈無常な人生〉の後継者として、死者といっしょに〈一度は死んだ〉自分の魂を再生させ、新しい〈生の関係〉の第
一步を踏み始めなければならない。

大きな試練と新たな第一歩。その間の心の揺れと自己の蘇生こそ葬送儀礼における私たちの倫理の前提なのではないか。〈死の
時間〉とは、これらの倫理を私たち自身が鍛えてゆくために必要な自然時間のことである。時間をしる形式ではなく、自然に流
れる時間の中で、私たちの〈新しい葬送の倫理〉をたずねてゆかなければならない。〈癒し〉とは、何よりもおのれの魂が、その
本来の在処^{ありか}に安住できることなのだ。

問1 傍線部(ア)と(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は 1 から 5

(ア) 拘束(コウソク)

1

① 暑い日のショウゾク
③ ソクセキの料理

② 野菜のソクセイ栽培
④ 噂をソクブンする

(イ) 重篤(ジュウトク)

2

① 取材源のヒトク
③ 人柄がトクジツである

② カトクを継ぐ
④ 仁、義などのトクモク

(ウ) 鎮魂(チンコン)

3

① 子供へのダチン
③ 黙考、チンシする

② 災害対策のチンジョウ
④ 会社のジュウチン

(エ) 精緻(セイチ)

4

① 奨学金のシンセイ
③ 暴動のチンセイ

② 天気セイロウだ
④ 選りすぐったセイエイ

(オ) 威厳(イゲン)

5

① 用務のイニン
③ 先達へのイケイ

② 相手をイアツする
④ 未曾有のイギョウ

問2 二重傍線部③④の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

6

8

③ もっとも古い文化表象の一つ

6

- ① 人類が共同生活の中で創りだしたもっとも古い契約の一つ
- ② 人類が生き延びるために身につけたもっとも古い習性の一つ
- ③ 人類が日々の暮らしの中から生み出したもっとも古い生活慣習の一つ
- ④ 人類が共存するために考案したもっとも古い慣例の一つ

④ パターン化した演出・プログラム

7

- ① 金銭の額によって差異の生じる葬礼の内容
- ② 故人の希望に沿って営まれる葬礼
- ③ 形式化した葬礼の内容・進行手順
- ④ 従来の習慣に基づいた葬礼の在り方

⑤ 度を越えた〈物の蕩尽〉

8

- ① 必要以上に物を使うこと
- ② 必要に応じてものを用意すること
- ③ 必要でもないのに物を整えること
- ④ 必要であるのに物を儉約すること

問3 傍線部(1)「現代は、〈死〉すら経済原理によって管理されてしまっている時代なのだ」とあるが、この部分の説明として最も

も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

9

- ① 現代は、「死」がお金の対価として考えられるようになり、利益を生む対象になってしまっていること
- ② 現代は、「死」に関わることが、専門業者によって、金銭で全て効率よく処理されているということ
- ③ 現代は、人の生活の全てが経済活動の一環として捉えられ、「死」であっても経済活動につながっているということ
- ④ 現代は、これまで禁忌の対象として扱ってきた「死」に関わることを仕事にする人が現れてきたということ

問4 傍線部(2)「〈死〉をめぐる古代的心性や宗教的感情」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の中から一つ

選んで、番号で答えよ。

解答番号は

10

- ① 死者を悼む痛切な思い、出来るだけ長い間身近にいたいという感情、さらに死者との交感を願う強い思い
- ② 死者を悼む痛切な思い、死者と再度会いたいとの思い、さらに死者への深い鎮魂の思い
- ③ 死者との忘れ難い思い、死者と離れ難いという感情、さらに死者の魂の安寧を願う思い
- ④ 死者を悼む痛切な思い、死者との再会を切望する思い、さらに死者の往生を願う思い

問5 傍線部(3)「人工的な手段によつて死体を保存する〔葬法〕に比べ、それが野蛮だと一概に言いきれまい」とあるが、その理

由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

11

① 遺棄葬、洞窟葬は、方法としては死体を放棄するものではあるが、葬送の際、葬送する者は、供花、供物などを備えるなどして丁重に送り出しているから

② 遺棄葬、洞窟葬は、死体を棄てるという面で人道に悖る方法ではあるが、当時の生活状況では一番望ましい埋葬の仕方だと考えることができるから

③ 遺棄葬、洞窟葬は、形の上では死者を放棄する粗野な処置ではあるものの、葬送する者が死者に対して深い悼みの心情を抱いてはいないとは断言できないから

④ 遺棄葬、洞窟葬は、死体を自然に戻すという考え方に沿った処置であり、自然と共存している人間にとって当たり前のことだから

問6

本文中の空欄

解答番号は

12

I

に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

① 非常識

② 非道徳

③ 非人道

④ 非人情

問7

傍線部④「自然に流れる時間の中で、私たちの〈新しい葬送の倫理〉をたずねてゆかなければならない」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

13

① 私たちは、死に遭遇して、人に与えられている時間が限られていることを認識し、自分の生のかげがえのなさに気づき、新たな道を見いだしていかなければならないということ

② 私たちは、死に遭遇して、死者との間に築いてきた関係性が喪失したことを明確に自覚し、死者の生を引き継いでいく者として、新たな生の関係を築いていかなければならないということ

③ 私たちは、死に遭遇して、死者との生前の想い出を銘記し、死者の魂を蘇らせる形でその生を引き継いで、新たな生の関係を生み出していかねばならないこと

④ 私たちは、死に遭遇して、死者との忘れ難い想い出を貴重なものとして自分のこれからの生に活かして、時間を過去、現在、そして未来へとつないでいかねばならないこと

第2問 次の文章は、小説「赤ひげ診療譚」の一節である。読んで、後の設問（問8～14）に答えなさい。

「病人たちの不平は知っている」新出^{にいできしやう}去定は歩きながら云った、「病室が板敷で、莫^も座^ざの上に夜具をのべて寝ること、仕着が同じで、帯をしめず、付紐を結ぶことなど、――これは病室だけではなく医員の部屋も同じことだが、病人たちは牢舎に入れられたようだと云っているそうだが、病人ばかりではなく、医員の多くもそんなふうにいるらしいが、保本^{やすもと}はどうだ、おまえどう思う」

「べつになんとも思いません」そう云ってから、登はいそいで付け加えた、「却^{かえ}つて清潔でいいと思います」

「追従を云うな、おれは追従は嫌いだ」

登は黙った。

「われわれの中で、もっとも悪いのは畳だ、昔はあんな物は使わなかった、水戸^{みづ}の光圀^{くわん}は生涯、その殿中に畳を敷かせなかったという、それは古武士的な質素と剛健^{かうけん}をとうとぶためだと伝えられるが、そうではない、事実はそういう気取りだったにしても、住居のしかたとしては極めて理にかなっていた、現に畳というものが一般に使われるようになった元禄年代まで、二千余年にわたって板敷の生活が続いていたことでもわかることだ」

「敷き畳という物はあつたのですね」

「それは貴人の調度であり、儀礼とか寝るときに使うだけで、板敷という基本に変わりはなかったのだ」と去定は云った、「板敷がもし合理的でなかったとしたら、すでに敷き畳があつたのだから、もっと早く畳というものが一般化されていたに相違ない」

道は坂にかかつていた。七月中旬の午後三時、暦の上では秋にはいつたのだが、暑さは真夏よりもきびしかった。その日は微風もなく、空は悪意を示すかのように晴れていて、うしろから照りつける日光は、まるで手に触れることのできる固体のように、立体的な重さが感じられるようであつた。登はもちろん、葉籠を背負った竹造も、着物の背中や二の腕あたりは汗ですっかり濡れているし、額から顔、衿首などにながれ出る汗を拭くのいそがしかったが、去定はまったく汗をかいていない。――登はこのことを夏にかかるころから気づいていた。脂肪質ではないが、去定は固太りに肥えている。両腕や広い肩には筋肉が瘤をなしており、手

も大きいし指も百姓のように太い、腰だけは若者のように細くひき緊っているが、ざっと見た眼には年老いた牡牛のような感じを与える。―したがって、暑さも人一倍だろうと思うのだが、どんな日盛りの道でも平気で歩くし、決して汗というものをかかない。暑いなどと云わないことには驚かないが、汗を一滴もかかないということは、登にはわけがわからなかった。

―先生は暑くないのですか。

或るとき登はそう訊いてみた。去定は言下に、暑いさ、と答えた。それがどうしたといわんばかりの返辞なので、登は汗のことまで訊く気にはならなかったのである。

「この国の気候は湿気が強い、畳はその湿気と塵埃の溜り場だ」と去定は続けていった、「ためしにどこの家でもいい、そしていま煤掃きを済ませたばかりの畳を叩いてみる、必ず塵埃が立つだろう、藁床わらじと藁で編んだこの敷物は、湿気と塵埃を吸い、それを貯めておくのにもつとも都合よくできている。もちろん、裕福な生活をしている者は、畳替えをしたりよく掃除させたりすることで、その不潔さをかなりな程度まで緩和できるが、貧しい者ではそんなわけにはいかない、保本もだいが裏長屋などを見て来たから知っているだろうが、十年以上も敷きつ放しで、畳替えはしないし掃除も満足にはやらないから、芯の藁床は湿気でぼくぼくになり、擦り切れた畳表のあいだからはわたのようにはみ出している、そこは蚤と虱の巢で、息をするたびに藁屑や塵埃を吸いこむことになる、床は低く、その下の地面はいつも湿っていて乾くひまがない、こんなところに寝起きをしていれば、病気になるのがふしぎなくらいだ」

これを養生所のように板敷にすれば、床下からの湿気も防げるし、莫座はたやすく日光や風に当てることができる。これだけを比較してみただけでも、どっちが合理的かということは明瞭ではないか、と去定は云った。ちようど坂を登りきって、本郷一丁目の通りを右へ折れるところだった。登は去定の説明を聞きながら、その理論の当否よりも、そういうところに眼をつけ、それを是と信じ、他の反対や不平に頓着せず、すぐに実行する彼の情熱と勇氣に感嘆した。

② ―先生のような人こそ、養生所という特殊な施設にはうってつけの人なんだな。こう思いながら、登は手拭いで汗を拭いた。そのときひよつと、向こうから来る一人の若者が眼についた。洗いざらしの単衣に三尺をしめ、藁草履をはき、片方の裾を捲つて、

ひよろひよると来たが、すれちがいさまにどんと去定に突き当たった。うしろにいた登の眼にも、明らかにわざと突き当たったということはわかった。不意をつかれて、去定はちよつとよろめき、すると若者が喚いた。

「やい老いぼれ、どういうつもりだ」

去定は相手を見、すぐに目礼して云った、「これはどうも、失礼した」

「失礼したあ」と若者は裾を捲つていた手で、こんどは片袖を捲りあげた、「やい、この広い往来で人に突き当って、失礼したで済むと思うのかよウ」

登はわれ知らず前へ出ようとした。しかし去定はそれを制止し、こんどは丁寧な頭をさげて云った、「見るとおりの年寄りで、考えごとをしていたために失礼をした、まことに申訳ないが勘弁してもらいたい」

「ちえッ」若者は眼を三角にして、去定を見あげ見おろし、だが、それ以上云いがかりをつける隙がないとみたのだから、脇のほうへ唾を吐いて云った、「ちえッ、縁起くそもねえ、感情悪くしちゃうじゃねえか、氣をつけやがれ」

半丁あまり歩いてから、登がいまいましそうに云った。

「ならず者ですね、ひどいやつだ、私はわざと突き当たるのを見ていましたよ」

「そうしたかったんだらう」と去定はあつさり云った。「人間はときどきあんなことをやってみたいような氣持になるものだ、若いうちにはな、——おれにも覚えがあるよ」

私は殴りつけてやろうかと思いましたが、登はそう云おうとしたが、口には出さず、拳を握ったまま黙って歩いていた。

その夜、——例によつておそい晩飯が済んでから、登は去定に呼ばれてその部屋へ行つた。去定は机の脇にある包みを取つて、登のほうへ差出し、長いあいだ済まなかつたと云った。

「なんでしょうか」と登は訊いた。

「いつか借りた筆記と図録だ」

登は頷いた。それは彼が長崎へ遊学したときのもので、各科の病理や解剖、治療、調剤にわたる記録で、この養生所の見習医になったとき、去定に求められて呈出したものであった。

「必要なところを筆写させてもらった」と去定は云った、「これは自身のためではなく、病人たちのために役立てるのだ、不服かもしれないが了解してくれ」

登は脇の下に汗のにじむのを感じた。それは、初めにその筆記図録を出せと云われたとき、彼は頑強に「これは私のものだ」と拒んだ。特に本道の部門には、彼なりにくふうした診断法や治療法があり、それによつて医界に名を挙げることができると信じていたからである。登は「内障眼（そこひ）の治療法だけで天下の名医といわれた人さえあるではないか」とまで云つたものだ。

「おれは今日、盗みもやつたと云つたが」と去定は苦笑しながら云つた、「これも盗みの一つだろうな」

「どうぞおゆるし下さい」登は低頭した、「あのときは分別がなかつたのです、いま考えると恥ずかしくつてたまりません、お願いですからもう仰しやらないで下さい」

自分の部屋に帰つて、記録の包みを戸納（とだ）へしまつてから、登は森半太夫（もりはんたゆう）の部屋を訪ねた。半太夫は机のそばに行燈をひきよせて、日記を書いているところだつた。入所患者に関する毎日の記事を書くのが、半太夫に任せられた事務の一つだつたのである。

「いま終るところだ」と半太夫が云つた、「そこに円座がある、ちよつと待つていてくれ」

登は脇にある円座を取つて坐つた。

半太夫を訪ねたのは、去定のことを知リたかつたからである。盗みをした、ということとはともかく、師を裏切つたとか、友を売つた、などという言葉には意味がありそうだし、大名諸侯や富豪から、礼をつくして迎えられるほどの腕を持つていて、いまだに妻も娶らず、養生所で独り不自由なくらしをしていることにも、なにか仔細がありそうに思えた。半太夫は古参でもあり、去定とはもつとも近いので、その経歴なども知つているだろうと考えたのだが、訊いてみると殆んどなにもしらなかつた。

「先生は決して自分のことは話さない方だから」と半太夫は云つた、「私の聞いたところでは、馬場穀里（ばばくり）の門下で、鍛冶橋（うた）の宇田川裕庵（がわようあん）は先生の後輩だということだ」

「馬場というと、洋学の、」と登は意外そうに反問した、「そして宇田川榕庵と同門の先輩に当るって」

「先生からじかに聞いたのではないから、どこまで真実かはわからないが、馬場氏がもつとも信愛していたのは新出先生だったそうだ」と半太夫は云った、「それで馬場氏は先生を自分の後継者にするつもりでいたところが、先生はそれを嫌って門下をはなれ、長崎へいって蘭方の医学をまなばれたということだ」

⁽⁴⁾ 登はどきんとした。いつか臍臓の癌腫で死んだ患者があつたとき、去定が蘭語ですらすらと病状を云った。登はそれを、自分の筆記で覚えたのだらう、と思つたのであるが、長崎へ遊学したことがあるというと、自分などより新らしい知識を持つてゐるかもしれない。語学の秀才だったとすれば、こつちにいても蘭語の医書が手にはいるし、実地に病人の治療をして来たのだから、自分の筆記などから覚えるようなことはない筈である。

—では筆記や図録を写したのはなぜだらう。

おそらく、と登は思つた。おそらくそれは、どんなものからでもまなぶ、という謙遜な気持ちなのだらう。⁽⁵⁾ 登は心の中で激しく、自分の軽薄さを罵つた。

「どうしてそんなことを訊くんだ」と半太夫が云つた、「先生になにかあつたのか」

登は今日あつたことを話した。

「わからないな」と半太夫は云つた、「師を裏切つたというのは、馬場氏の門下を去つたことかもしれない、たぶん、語学の後継者という師の望みにそむいたことをさすのだらうが、盗みとか友を売つたなどということは、現実的な意味ではないのじゃあないか」

「そうも思つたのだが」と登は頷いて云つた、「ひどくしんけんに、告白するというような口ぶりだったのでね、しかし、たぶん言葉どおりではないだらうな」

「自分には特にきびしい人だからね」

登はまもなく立ちあがつた。

次にみくみ町へいったのは、まえの日から七日めに当たる、雨もよいの午後のことであつた。梅雨でもかえたように、湿つぱくむしむしする日で、六ヶ所回診するうち、三度めにいやなことがあつた。それは日本橋白銀町の、和泉屋徳兵衛という質両替商で、四十一歳になる妻女が中風になり、半年ほどまえから診察にかよつていたのだが、去定は例のように高額な薬礼を取つてい、それを徳兵衛が不当だと思つていたらしい。診察をし薬の調合を変えて与えると、側で眺めていた徳兵衛が茶をすすめながら皮肉な顔で去定に話しかけた。

「つかぬことをうかがいますが、^⑤医は生死のことにあずからず、ということがあるそうですね」
「あるようだな」と去定は答えた。

「するとなんですか」と徳兵衛はそらとぼけた声で云つた、「治る病人は治る、死ぬ病人は死ぬ、医者を知つたことではない、というわけでございますかな」

「そういう意味もあるだろうね」

「するとその、藪医者も名医も差別はない、高価な薬も売薬も同じことだ、というわけになるのでしょうか」そこで徳兵衛はわざとらしく

付け加えた、「もちろん新出先生のような御高名な方はべつとしてですが」

「私をべつにすることはない」と去定は答えた、「おまえさんの云うとおり、医者にも薬にもたいした差別はないというのが事実だ、名医などという評判を聞いて高い薬礼を払つたり、^⑥効能も知れぬ薬を買いあさつたりするのは、泥棒に追い銭をやるよりばかげたことだ――なにかそのほかに訊きたいことがありますか」

「これはどうも、御機嫌を損じたようでございますな」

^⑦「いやなかなか」と去定は立ちあがりながら笑つた、「このくらいのことで肚（はら）を立てるようでは、金持のたいこ医者が勤まるものではない、その懸念は御無用」

外へ出るとすぐに、去定は「^⑧吝嗇漢」と云つて唾を吐いた。それから三軒廻つたのだが、機嫌の直るようすはなかった。登もこ

れまで外診の供をしていて、去定がそんなことを云われるのを見た例はなかった。町家はいうまでもなく、大名諸侯でさえ、相当以上の礼をつくして迎えるのがつねであつた。

—ひどいやつがあつたものだ。

徳兵衛の皮肉な、そらとぼけた口調や、色艶の悪い顔にうかべた卑^ひしい表情などを思い返すと、登もまた唾をはきたいような、いやな気持になるのであつた。

六軒めの回診が終つて出たとき、去定は空を見あげて、「さて」と呟き、そのまま暫く立停つていた。竹造は背負つた薬籠をゆりあげながら、うかがうように登を見た。登は眼で、黙つていろという合図をした。

「まだ帰るには早いな」と去定はわれに返つたように云つた、「よし、みくみ町へ廻つてやろう」

そして元氣よく歩き出した。

(山本 周五郎 「赤ひげ診療譚」より)

問8 傍線部(ア)～(オ)と同じ漢字を含むものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

14から

18

(ア) 剛健

14

- ① ゴウマンな振舞い
- ② 反対をゴウインに押し切る
- ③ 未来エイゴウ変わらない
- ④ 人柄がゴウキで朴訥だ

(イ) 緩和

15

- ① 緊張がシカンする
- ② 人生のアイカン
- ③ カンガな別荘地
- ④ 説明がカンメイだ

(ウ) 頑強

16

- ① ガンチクに富む文章
- ② 他人を受け入れないガンメイさ
- ③ 熟読ガンミする
- ④ 国へのセイガン

(エ) 効能

17

- ① コウキュウの平和
- ② 細工がセイコウである
- ③ 事件のジコウが成立する
- ④ 産業のシンコウを図る

(オ) 卑しい

18

- ① ヒレツな振舞い
- ② 山奥のヒキヨウ
- ③ 役職のヒメン
- ④ 災厄をカイヒする

問9 二重傍線部①～④の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の中から一つずつ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

19

21

① 眼を三角にして

19

② 心配で厳しい目つきをして

③ 関心を持ち目を凝らして

④ 怒りで目尻をつり上げて

⑤ 驚きのあまり目をあわただしく動かして

⑥ 医は生死のことにあずからず

20

① 医者は病人の治癒に関わっているので、当然人の生死と関係がある

② 医者は病人との関係を第一義としており、病人の生死はその結果に過ぎない

③ 医者は病人には対応できるが、生死には対応できない

④ 医者は病気の治癒に関わるもので、人の生死とは関係はない

⑦ 泥棒に追い金をやる

21

① 自分の行為や状況をわきまえないで願った事をする

② 損したうえにさらに損をする

③ 罰せられて逆に人を恨む

④ 人間だつたら誰しも多少の盗み心を持っている

問10

傍線部(1)「その日は微風もなく、空は悪意を示すかのように晴れていて、うしろから照りつける日光は、まるで手に触れることのできる固体のように、立体的な重さが感じられるようであった」とあるが、この部分の表現上の特色を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

22

- ① その日の暑さを、「固体」、「立体的な重さ」のように物・量で象徴的に言い換えて身近に存在するように表現している。
- ② その日の暑さを、図らずも厳しい状況に追いこまれ難渋している様子を擬人化することによって表現している。
- ③ その日の暑さを、直喩を繰り返して、直接身体で実感しているように感覚的に表現している。
- ④ その日の暑さを、天が人間に意地悪をしているとの寓話で、人はそれに耐えるしかないと教訓的に表現している。

問11 傍線部(2)「―先生のような人こそ、養生所という特殊な施設にはうってつけの人なんだな」とあるが、「保本登」が思い描

いている「先生」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

23

① 市井の貧しく、恵まれない人々が頼りにする養生所では、現前の不可欠なことを瞬時に判断し、どんな困難があろうともそれを果敢に実現させていく行動力が求められるが、そのような資質を十分に備えている医者である。

② 市井の人々が利用する養生所では、日常の生活における衛生管理には特に留意しなければならないが、そんなところにも十分に注意の行き届く配慮深い医者である。

③ 市井の人々の誰もが頼りにしている養生所では、日々多くの病人の診察や街中への往診が求められるため、医者としての自覚と身体の頑強さが不可欠であるが、その気力と体力を兼備した医者である。

④ 市井の人々だけでなく、世間から見捨てられた人たちも最後の拠り所としている養生所では、医療だけでなく、来診者の抱えている日常の諸問題にまで対処しないといけないが、そういうことにも心こめて相談にのる心優しい医者である。

問12

傍線部(3)「登は脇の下に汗のにじむのを感じた」、傍線部(4)「登はどきんとした」、傍線部(5)「登は心の中で激しく、自分の軽薄さを罵った」とあるが、これらの部分にうかがえる「登」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

24

① 医者は新しい知識や技術を社会に還元するのが当たり前なのに、それに気付けない己の無知に忸怩たる思いをしている。

② 医者は測りたい未知の世界と関わっており、どんなことでも食欲に学ぶべきなのに、その謙虚さを失っていたと自責している。

③ 医者が学ぶことは多く、身近な同僚が他者には分からない努力をしているのに気づき、自分の精進の足りなさを痛感している。

④ 医者の経験もないまま、自分が学んだ医学の知識や技術を過信し、自分を絶対視していた愚かさに恥じ入っている。

問13

傍線部⑥「『いやなかなか』と去定は立ちあがりながら笑った、『このくらいのことで肚を立てるようでは、金持のたいこ医者」が勤まるものではない、その懸念は御無用』とあるが、この部分にうかがえる「去定」の人柄の説明として最も適当なものを次の中から一つ選んで、番号で答えよ。

解答番号は

25

① 欲深い商人の露骨な不満に接しても、意図的にへりくだる態度をとって、相手の銚先をさりげなく交わしてしまうしたたかで不屈な人柄

② 利に聡い商人の心の奥を見透かし、その強欲さを逆手にとつて、相手の癪に障ることをもみずけと言いつつ自分の考えることを貫こうとする正義感の強い人柄

③ 気に障る商人にも、養生所の資金を得るためには、世辞を言い、相手の意を損なわないようにする配慮を持ち合わせている融通無碍の人柄

④ 計算高い商人の意地悪さに対しても、真正面から向き合い、皮肉を交えながら相手の弱点を突いて、結局は自分の考えを納得させてしまう頑固で一徹な人柄

問14

傍線部(7)「『まだ帰るには早いな』と去定はわれに返ったように云った、『よし、みくみ町へ廻ってやろう』そして元気よく歩き出した」とあるが、この部分の「去定」の心境を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

解答番号は

26

- ① 商人への嫌な思いを振り払って医者としての自分を取り戻し、自分に課せられた職務を果たしていこうという心境
- ② 本来自分が相手にするのは庶民なのだということを思い起こし、余った時間をその人たちのために生かそうという心境
- ③ 貧しい人たちの生活に少しでも役立てるように、医者として、今、自分にできることを精一杯やっいていこうという心境
- ④ 自分の職責を思い起こし、今一番求められているのは人々のために最善を尽くすことだと自分に言いかけせる心境